



LA NOUVELLE

N°3

AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 神奈川孝子 (昭37)
2009.9.15 発行

仏友会総会報告

第13回仏友会総会が4月25日、東京・大手町サンケイプラザで開かれた。参加者は55人と例年に比べやや少なかったものの会員にとって年に一度の最大イベントであり、会場のあちこちで旧交をあたためる話の輪が広がった。

神奈川孝子会長、藤倉洋一副会長による08年の活動を振り返る会務報告、会計報告の後、副会長の川口祐司教授から大学の近況について、大学院の拡充がさらに一歩進んでいる、との報告があった。会務報告の中では仏友会の親睦紙「LA NOUVELLE」の08年秋の創刊号発行も報告され、報告事項は全て承認された。

会后恒例の講演は中村恵さん(昭58)＝日本UNHCR協会・事業部シニアマネージャー＝が「難民問題から学んだこと－UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の活動を通して」の演題で話した。

東外大卒業後、フランス・カン大学に留学、外資系企業でシステムエンジニアとして活躍後、あこがれのUNHCR入りし、1989年から2000年まで同機関で過した。

特に89年～93年のジュネーブでの4年間の本部勤務中の体験談に興味深かった。外部からはうかがうことのできない「国際公務員」の仕事ぶりが少しばかり分かったような気がした。



中村さんは国際化の象徴のような多国籍集団での文化摩擦をマイナスにとらえずに、逆に楽しんでいたようで、現役の学生たちにとってもよき刺激になっただろう。

中村さんにとってUNHCR勤務中の最大の驚きは第8代高等弁務官に緒方貞子さんが就任し、ジュネーブ本部で91年2月から勤務を始めたこと。緒方さんの赴任をきっかけに日本人スタッフの間で高まった気持ちの充実ぶりがこちらにまでよく伝わった。

63歳で赴任してきた緒方さんの英語は素晴らしかったが、赴任後、磨きをかけた仏語もスピーチするのに十分にまで上達して周囲を驚かせたという。

クルド、旧ユーゴスラビア、ルワンダと90年代初から半ばにかけて空前の人数となった難民、避難民に対し、緒方さんが断行した様々なテキパキとした救済策の裏で、日本人スタッフの獅子奮迅の下支えがあったことに改めて気付かされた。

ジュネーブでの勤務を終えて、いったん東京に戻った後、2回目の海外勤務地として中村さんが選んだのはミャンマー(旧ビルマ)であった。

同地域ではフランスの非政府援助団体(NGO)の活躍ぶりが目立った。「無菌のキレイキレイの日本人にはとても途上国勤務は向いていない。学生さんたちがもし、将来の職業選択として地球をまたにかけた仕事を望むなら、キャンプ生活などして積極的に身体や胃腸を鍛えてほしい」と中村さんはアドバイス。

同地での1年半の勤務の後、日本に戻り、社会人大学院で学び直した。日本という舞台を活動基盤にして自らが10年間のUNHCR勤務で学んだことを社会に還元していくことを決意したころ、UNHCRから日本での広報、募金活動拠



点づくりへの参加を求められ現在の日本UNHCR協会での活動へと進んでいった。

同協会への募金、寄付状況について、名前の知られたユニセフ、ユネスコなどと比べて残念ながらまだまだUNHCRに関する一般の日本人の理解は少ない、との発言が印象に残った。

この後の懇親会はワイン、料理もふんだんに用意され、いつもながらの大盛り上がりであった。和賀千恵子幹事(昭45)の軽妙な司会で仏友会前会長渡辺昌俊さんがご自身によるパスツール研究所に対するボランティア支援活動を披露、乾杯した。

また、この日特別参加の現役の3学生、仁井田航君、亀井雄一郎君、佐藤礼菜さんの3人が08年秋の外語祭の語劇『愛と偶然の戯れ』出演の感想などをそれぞれ述べた。

この日の参加者全員を対象に実施したアンケート調査(回収10)では「自分よりずっと若い中村さんが敢然と自分の信じる道に転身され輝いているのを見て羨望の気持ちとともに感動した」などの声が寄せられた。

西敏彦(昭46)

「難民問題から学んだこと

－ UNHCR(ユーエヌエイチシーアール)
(国連難民高等弁務官事務所)の活動を通して」
中村 恵 (昭58)

国連職員として UNHCR ジュネーブ本部で勤務

東外大卒業後、ロータリー財団奨学生としてフランス・ノルマンディー地方のカン(Caen)大学に1年留学しました。ヨーロッパ旅行中に立ち寄ったスイスのジュネーブに、5年後の1989年3月末から4年近く暮らすことになりました。国連職員としてUNHCR本部に勤務することになったからです。

UNHCRは、難民が出る状況では緊急援助を、難民の避難先では数年から数十年にわたる生活支援を行い、各状況に応じて難民問題の3つの解決策(本国への帰還・庇護国での定住・第三国での定住)を目指す国連の人道支援機関です。

最初の上司は、英・仏・露・アラビア語を話せるアフリカ出身のスウェーデン人でした。エリトリアからの難民としてスウェーデンで新たな国籍を得たそうです。国連職員の中には、元難民で自分の生まれた国には簡単に帰れない人が少なからずいて、自分に日本という安定した祖国があることは、決して当たり前ではないと感じるようになりました。

UNHCRの変遷

難民を国際的に保護する役割を担う国連機関として1951年に活動を開始したUNHCRは、東西冷戦を背景として、東から西に保護を求める人々や、米ソの代理戦争の犠牲者として難民となった人々などを援助して来ました。1989年11月のベルリンの壁崩壊以降は、多くの難民問題が解決に向かい、UNHCRの役割も終わるのではないかとの期待が高まりました。

そんな機運が残っていた1991年に、緒方貞子さんが第8代 国連難民高等弁務官に就任されました。退任された2000年末までの10年間は、結局、ユーゴスラビアやソ連邦の分裂、ソマリアやルワンダの内戦などによって新たに難民や国内避難民となった人々が、UNHCRの援助を必要とす

る激動の時代となりました。

今でもソマリア、スーダン、コンゴ民主共和国、アフガニスタン、イラク、スリランカなどで、深刻な状況が続いています。アジアでも、タイのミャンマー難民、バングラデシュのミャンマー難民、ネパールのブータン難民といった難民問題が長期化しています。

援助の最前線、UNHCR フィールド勤務

ジュネーブ本部から東京事務所広報室に移った私は、1997年12月にミャンマーに赴任しました。任地は、バングラデシュとの国境に位置するラカイン州北西部にあり、首都ヤンゴンから飛行機、船、自動車を乗り継いでようやく辿り着く僻地でした。マラリアに脅え下痢に悩まされながら、フランス、クロアチア、タイ、フィリピン、中国、マラウイ、エチオピア、スーダンなど出身の単身赴任の同僚たちと助け合いながら暮らしました。彼らから顔の見える世界史や世界の現実を学んだ私は、日本がいかに自由で豊かな国であるかを思い知らされました。

厳しい環境であればこそ仲間との絆は強まり、毎日が新鮮なフィールド勤務でしたが、捻挫してひと月松葉杖生活も体験し、長く続けるのは肉体的に難しいと感じました。

後方から支える難民支援

最前線での援助活動は、各国政府からの任意拠出金と民間からのご寄付に支えられています。後方から支える活動であれば、私にも長く続けられると思い、2000年末に緒方貞子氏が国連難民高等弁務官を退官された同じ時期に、私もUNHCRを退職し、その日本における公式支援窓口となる「国連UNHCR協会」の設立に参加しました。(※2009年4月に日本UNHCR協会から名称変更)

今年5月末から7月4日までNHK土曜ドラマ「風に舞いあがるビニールシート」(原作者・森絵都)が、5回にわたり放映されました。このUNHCRを題材としたドラマを通して、より多くの方々が難民支援に関心を持ってくださるよう願っています。

日本では、タイの難民キャンプで暮らしているミャンマー難民を、2010年から3年間にわたって毎年30人ずつ日本

に受け入れるパイロットプロジェクトが始まります。世界全体と自分とはつながっています。これからも私は、自分のできることから手を抜かずに行って行きたいと思っています。

《編集者より》

UNHCRは、United Nations High Commissioner for Refugeesの略。通称「The UN Refugee Agency」(国連難民機関)も使われます。

在校生の声

先日は素敵な会にお招きいただき、ありがとうございました。とても貴重な思い出となっています。

中村さんのお話は、将来に悩む私たちにとって大変興味深く、聞き入ってしまいました。また、皆様とお話できたことが、本当に嬉しかったです。私は親戚を多く亡くしており、失礼かもしれませんが、皆様が本当の祖父母や叔父、叔母のように感じられ、とても幸せでした。それに加えて、おいしいお料理とお酒までいただき、感謝感激です！ご迷惑でなければ、今後も参加させていただければ幸いです。本当にありがとうございました。

佐藤礼菜(フランス語専攻3年在学中)

－ 著 書 紹 介 －

『トラップ、トリップ、マップ、イヨネスコ』

－ユネスコ世界文化遺産ではありません－

日和見庵放翁 著

〈本名 大谷尚武(昭42)〉

新刊発売中 1,470円

<http://www/7andy.jp>

文芸社(03-5369-2299)

演劇探偵とともに、ヨーロッパ不条理演劇地図を巡るマジカル&ヒステリカルツアーへようこそ！！

お申込：クロネコヤマトブックサービス 0120-29-9625

文化外交の拠点、パリ

駐仏日本大使館公使 渡邊啓貴 (昭 53)

今回パリに来て二回目の夏を迎えた。三十年来大学だけで生活してきた人間にとって、時を駆けるとはまさにこのようなことであるのかと思う毎日であった。本当に沢山のの人に会い、多くの会合に出席した。

広報文化の仕事に境界はない。昨年横浜で行われた TICAD IV(アフリカ開発会議)、洞爺湖サミット、パリでのアフガニスタン支援会議の記者会見やブリーフィングにはじまり、ルーティンワークともいえる捕鯨・死刑・領土・歴史問題などに関する政府見解の広報、政治家の接遇、展覧会やコンサート開催のお手伝い、芸術イベント・学校行事・レセプション・食事会への出席など文字通り何でもありである。政府・パリ市当局の広報文化関係のカウンターパートの役人はもちろん、ポンピドー、オルセー、ギメ美術館などの主だった美術館長、シンクタンクの代表、グランドゼコール・大学学長や研究者、芸術家・役者・映画監督などにも会う。それにフランスを足場に活躍する日本人アーティストなどが毎日のように企画の相談に訪ねてくる。

端的に言って、日仏関係に大きな懸案事項はない。サルコジ大統領がシラク大統領と違って日本に冷たいという風聞が伝わるが、それは必ずしも正しくない。現政権が前政権とは異なった政策をとるのは当たり前で、だからといって日仏関係が剣呑になったわけではない。通商摩擦や離婚後の子供の親権をめぐる議論はあるが、だからといって日仏関係決裂などと騒ぐ人はいないであろう。

そうした中で私はパリにいて、日本外交にとって文化がきわめて重要となっていることを再発見した。いわばソフトパワーである。フランスでは日本文化は大ブームである。テレビでは何らかの形で毎日のように日本の紹介が放映される。有名な高級レストラン・タイユヴァンの支配人の手紙には日本食の一品を用意したので食べに来てほしいと書いてある。著名な日本画家のオープニングで挨拶すると、近づいてきたのがブルボン家王子夫妻で、自分たちも日本ファンであると親しげに話しかけてくる。

何もこちらから仕掛けなくともフランス側からアプローチがある。日本文化関係のイベントは「ペイ」するのである。

渡辺前会長フランス政府より叙勲

6月1日(月) 渡辺昌俊前会長がフランス政府より叙勲された。

当日、フランス大使公邸で、パスツール研究所のフランスワーズ・バレスヌシ博士の来日を記念して『ルイ・パスツールの夕べ』と銘うったチャリティ・ディナー・パーティが開かれた。日本パスツール協会の主催で、参加者は200名を超える盛会となった。

6時半から始まったパーティでは、1983年にHIVウイルスを発見した功績で2008年ノーベル医学生理学賞を受賞したバレスヌシ博士が講演を行い、その直後、フィリップ・フォール駐日フランス大使から、伝統に則って、10分以上にもわたり功績の内容が紹介され、渡辺さんに「フランス国家功労賞オフィシエ」(Officier de l'Ordre National du Mérite) 勲章が授与された。

渡辺さんは、現在日本パスツール協会の会長だが、東京銀行(現東京三菱UFJ銀行)での支店長を含む3度のパリ支店勤務はもとより、ベトナム勤務や帰国後の在日インドスエズ銀行や日本パスツール協会での要職にあって、フランスとの途切れることのない縁を通じて、フランスに多大な貢献を行ったのが、今回の受賞につながったもの。パリでは、日本商工会議所会頭やパリ大学都市日本館の理事を務め、日本では日本フランス商工会議所副会長を務め、パリクラブ(日仏経済クラブ)の設立や「国境なき医師団」の活動に奔走するなど日仏の架け橋としての実績が認められたものだが、フランスに対する思い入れや愛着は人一倍であり、まさに全身全霊でフランスに貢献してこられたといえる。

日本パスツール協会は、05年3月に設立された特定非営利法人だが、日仏を中心とした内外研究者の交流促進と最先端医科学情報の普及と公衆衛生の向上を目的としており、常陸宮正仁親王殿下が名誉総裁となって、活動を行っている。

関連ホームページは、www.pasteur.jp/ です。

藤倉洋一 (昭 45)

政府刊行物センターがこれまでとは違う一歩踏み込んだ日本特集の本を出す企画をつくると連絡してくる。フランス文化庁全国図書センターからは村上春樹はじめ日本の現代作家を十数名ほど招聘して「外国文学祭」を行いたいという話を持ちかけられる。パリ市当局から恒例の宗教音楽祭での日本の「雅楽」特集や日本の夏祭り恒例化の企画が舞い込んでくる。進歩的知識人派の『ヌーベル・オプセルバトワール』誌の社主が昼食を出すから来社するようにというので出かけたなら、80歳を過ぎる社主は、自分は日本のファンになったから何か力になりたいという。来年のモナコ王国恒例行事の夏の展覧会は同国の最大美術館開設十周年記念として日本特集である。

この勢いをうまく利用すべきである。何かあると日本を敵視するのではなく、日本は繊細な感情表現を共有できるレベルの高い文化と歴史の国であり、常に同胞の国であるという意識をフランス人に持ってもらうことである。それは恒常的な友好関係の基礎であり、強力な外交ツールでもある。その点では戦後一貫して平和国家のイメージを伝えてきた日本外交は有利な立場にあるといつてよい。06-07年BBCワールドサービスの調査ではカナダと並んで日本は世界への肯定的影響力を持つトップの国である。

昨年日仏外交樹立150周年の成功はこうした日本文化の普及に大きな弾みをつける契機となった。フランスでは大小758の企画が記念行事として日本大使館に登録された。「北斎展」や出光美術館・フランス国立図書館所蔵の浮世絵展、邦画展、着物展、盆栽展などは有力日刊紙や雑誌でも大々的に取り上げられ、大成功だった。浄瑠璃や狂言公演、相国寺派金閣寺・銀閣寺所蔵の仏像・絵画、さらに金刀比羅宮の円山応挙の襖絵や金箔の茶室の展示はいずれも日本でも容易に見られない貴重なものだった。現代的趣向をこらした能公演「源氏物語千年紀」のチケットは即日完売と聞いた。パリの地下鉄や街路を日本の浮世絵や着物のポスターがこれほど賑わした年もなかったのではなかろうか。

しかしどんなに伝統芸術・文化が味わい深く、フランス人がそれを理解するだけの繊細な感覚を持っているとしても、やはり伝統文化の理解には限界がある。それは急速に広がるものではない。日本がこれだけ人気を博している背景には、ポップカルチャーの隆盛がある。コスプレ競争やマンガ教室、アニメDVD・マンガの販売、日本のポップ・ソングのコンサートなどを企画する場である「Japan Expo」は今年で十回目を

迎え、4日間の入場者数が16万人を超えるまでに成長した。政府も広報外交(パブリック・ディプロマシー)の具体的措置のひとつとして、伝統文化とポップカルチャーの双方の活用を強調し、アニメ大使(ドラえもん)、国際漫画賞などを設置した。今年日本の少女ファッションを伝える「カワイイ大使」(十代のタレント)二人が来仏、日本人体型の彼女たちがキティちゃんや日本少女ファッション姿のフランスモデルに混じってファッションショー、トークショーやサイン会を実施した。「Japan Expo」には今年から経産省からもコンテンツ産業の広報のブースが出された。NHK会長も訪れ大変な盛況であった。来館する若者たちの多くが思い思いのコスプレの出で立ちで、漫画・アニメのスタンドでショッピングしたり、テレビゲームにうち興じる姿はさながら「参加型見本市」である。金魚すくいまで出店し始め、日本の物産店が今年からは目立つようになった。本来の漫画・アニメの見本市はさながら「日本の夏祭り」となって行きつつある。

この日本ブームが真の意味で「ネオジャポニズム」として定着するのか。それとも一過性のものとしていずれフランス文化の一部に吸収されてしまうのか。これからが正念場であろう。第一に、それには「ホンモノ」を伝えることである。現代と伝統のフュージョンの趣をもった企画も結構あるが、フランス人を納得させるだけの技量は不可欠である。第二に、日本文化の真の理解にはやはり日本語の普及は必要条件である。日本語高等教育資格アグレジェはこの4年間採用ゼロであった。これも私の部署の仕事なので、私も国民教育省国際局長と何度か掛け合った。日本語教師会や大使のプッシュもあって、来年ようやく1ポスト確保できる予定であるが、その先の保証はない。そして最後に文化外交を通して何を伝えるのか。発信すべきメッセージは何か。問題はそこにある。

本来文化には個性と普遍性の二面性がある。日本独自の伝統的な趣向や発想、表現形式の発信は重要であるが、そうした個性を支える普遍的な価値をどれだけ意識し、伝えていくのか。愛・連帯・平和といった普遍性をわれわれがどう捉え、メッセージとして送り込んでいるのか。

日仏150周年でせつかく盛り上がった文化交流の火は消してはならない。それにパリは世界へつながる外交・文化の舞台である。ここはがんばり時でもある。二年毎、三年毎でもよい。たとえば「日本文化週間・月間」のようなことを恒例化させていくこともひとつのアイデアであると思う。

<嬉しいニュース>

第11回サロン仏友会でみごとなチェロ演奏をみせてくれた上野通明くんが、あのチャイコフスキー・コンクールで、第1位(ジュニア部門)を獲得されました。会員みなさまの励ましが通じたのかもしれない。天才少年の将来がたのしみですね。

坂井英俊(昭40)

TV放映予告

<題名のない音楽会>「未来の神器」

TV朝日10月18日およびBS放送10月24日・25日

第14回サロン仏友会のお知らせ

～講演とボジョレヌヴォを楽しむ会～

日時 2009年11月21日(土)

講演 午後2時～3時半

講師 鈴木光子 氏 (昭36)

(元スイス政府観光局次長、日本ペンクラブ等所属著述家)

演題 「言語を中心としたスイス事情

～『いとしのエラ』を翻訳して(仮)

ワイン・パーティ 午後3時半～5時

会場 本郷サテライト3F, 8F

会費 2,000円

10月上旬にメールまたは往復葉書でご案内します。

申込みは11月7日(土)迄

連絡先: 相馬壽美乃(昭39) TEL/FAX 03-3465-6835

富山 絢子(昭39) ANB73700@nifty.com

神奈川孝子(昭37) mt-kana@mx6.mesh.ne.jp



席上の渡辺昌俊前会長とフィリップ・フォール大使

『いとしのエラ～エラ・マイヤールに捧げる挽歌』

Chère Ella-Élégie pour Ella Maillart を翻訳出版

鈴木光子 (昭36)

20世紀最高のスイス人女性冒険写真家、エラ・マイヤールの最晩年を描いて、介護される人の尊厳と品格を、余すことなく伝えた詩文。日本語版刊行にあたって駐日スイス大使、ポール・フィヴァ氏が献辞を寄せ、スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団の後援も受けた。

1903年にジュネーブに生まれた行動の女性エラ・マイヤールは、1930年代に、未開の中近東やアジアへ、特派員やカメラマンとして数度の極限の旅を敢行。インドの賢者のもとで修行を積み、アジアとヨーロッパ双方の世界観を自らに体現した。

後半生を過ごした、美しいスイスアルプスのシャンドラン村、標高2千メートルの山荘で、90才を過ぎたエラが、「人は如何に生き、如何に死ぬべきか?」を、研ぎ澄まされた言葉で語りかける。

これは、語り部アンヌ・ドゥリアが紡いだ、老人介護の極致を著わす詩文である。

訳者の鈴木光子は、スイス政府観光局次長として長年スイスに親しみ、著書に、「スイス歴史紀行」(読売新聞社)、「スイスとっておきの旅便り」(JTB)。「ジュネーブとレマン湖地方」(日経BP)などがある。

日本ペンクラブ、日本旅行作家協会会員。

URL:www.office-romandie.info

定価 1,500円(+税)

ISBN978-4-89306-176-8

出版社 BOC 出版部

